

# 佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110 - 1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

## 個人の感想です

### 三股金利

今朝の地下鉄、久々の光景だった。向かいの黒いスーツ姿の男の胸には真っ赤なスカーフ、左手は挙げたまま窓の筋交いのように斜めのまま眠り込んでいる。糸が絡み合って動きのとれないマリオネツトのように見える。

足元にはコンニャク大のチラシが周囲に散乱。垂れ下がった右手には数枚が残り、東京・大集合の文字が読める紙片を踏まないように、彼の周りだけソーシャルディスタンスが保たれている。

こういう姿を見るとなぜか結末を拝みたくなるのだが、遅刻の理由にもならないのでうしろ髪をひかれる思いで改札を抜けた。

（うしろ髪はまだある）

でも、どうしてあのようにになったか。気にならないといえバウソである。

その一、会社員にしてはあのスカーフはあり得ない。ということではある劇団の一員。練習の打ち上げで朝まで飲んだ。公演のチラシをそれぞれ分け与えられ電車の中でそれを見ているうちに睡魔に襲われてしまった。

その二、彼はイベント会社の社員。「明日も午後出勤だ。」飲食店の解禁で一気にタガが緩み、女の子のいる店も堂々と朝まで営業していたので幸せな時間を今も過している。チラシは今日の公演のもの。

その三、実はマジシャンである。コロナの鎮静化で久しぶりにお呼びがかかった。仕事の後には酒を飲まなければ済まない性分なので居酒屋で一杯ひっかけ、気が大きくなつて女性のいるところに顔を出した。得意のマジックを披露し調子に乗ってトラップにかかった彼は正体をなくす。あの姿は手のひらからお札を無尽蔵に出しているポーズだった。



その四、実はすでに亡くなっている。突然の病に倒れた彼を周囲

は迷惑な酔っぱらいだと決めつけている。見かけによらずまじめな性格だがチラシが置かれていると思わず手に取ってしまう癖があった。まさか絶命しているとはだれも思わない、見て見ぬふり。冷たい世の中で冷たくなっていた。丸の内線の荻窪と池袋を行ったり来たり。今日の終電「この電車は車庫に入ります。」見回る車掌によってやっと地下鉄を降りることができた。



東京に通い始めて十六年目。運転がないことで酒は楽しめるし、季節の移りも窓外の景色だけでなく装いで感じられる。何といってもやることがないので本も楽しみのひとつ。髪の毛長い人に肩を貸してあげたのに男だったなど残念なこともある。

酔っぱらいはたくさん見てきたし、帰りの車内で崩れ落ち女性に声をかけられたこともあった。（他人事ではない）この時は飲みすぎの貧血だったのですねに回復したが、遠のく電車の音だけは今でも覚えている。

車内は社会の状況を映し出している。込み具合や乗客の雰囲気。子供の泣き声も少なくなった。

コロナに翻弄されていた状況からようやく乗客の数も増えてきたが酔っ払いの姿はまだあまり見ない。昨年冬から始まったこの騒

ぎは人々の行動に大きな影響を与えたえ、もともと持っていた性質があらわになっていようだ。

私は頭頂もハゲているので風が吹き込まない席を選んで座っているのに、後から乗りこんできたサラリーマンは無頓着に私の頭越しに両手を伸ばし当然だと言わんばかりに窓を下げた。（気持ち悪くないでもないけどさー）

普通の手袋の上から使い捨てのビニール手袋を重ねている人。（外に出ないほうがいいんじゃない）

身だしなみで危険性を判断する人。隣にちよつとだらしない風貌の人が来ると席を立つおばさん。咳のする方を必ず睨む人々。自分以外はみんな汚染されていると思っているのだろう。

東日本大震災で汚染地区になり故郷を追われた子供たちに対するイジメや福祉施設ができるかわりと敏感に反応する人たちと同じか。見えないもの、わからないことに対する恐れか。それでも常軌を逸していることがたくさんある。もつと理性的になれないものか。そう思いがちなのは施設整備で再三浴びせられた言葉が染みついていいるせいかもしれないけど・・・

とにかく行き場を失い、感動も反省もない夜と朝をやり過ごす毎日にととうとう私のハートは変調をきたしたのだ。5時近くになるとなぜか元気がなくなるといいう、アフターファイブ鬱という新たな病に悩まされていた。（高名な医者でもまだ知らない）

そうなるにしてもテレビの時間が長くなる。気づいたのは高齢者向けのコマースシャルの多いこと。何かわからないままドキュメンタリー仕立ての行きつくところはおいしそうに飲むサプリメント。

私の体は今腰痛や膝痛と戦っている。その隙間に入り込むような平和の笑顔。休戦協定も無視され続けられると、何かにすがりたいと誰しも思う。だが、一瞬その気持ちを感じとどまらせたのは画面に小さく表示された「個人の感想です」。もつと大きな堂々とした文字であつたら、「そら当たり前だろ。」効くこともあれば効かないこともあるさ。」と受け入れ、親戚の名も借りて注文したのだが、この小ささが気に食わない。人を貶めようとしている。お魚啜えたドロボー猫のようじゃないか。サツと消える。

猜疑心に満ち溢れている私は腰が痛くて死ぬことはないし普段の考えに戻るのである。ついでに電話営業と儲かる話も付き合わないと決めている。「そんなに儲かるならお宅がお金を借りてやつてもいいんじゃない。俺だったらそんな旨い話は人に漏らさないけど。」と丁重にお断りしている。

「俺は今朝までとことん飲んだぞ。」という姿を見たとき不謹慎ながら元気づけられた。都合良く事象を取り上げていることは百も承知だ。そんな確証バイアスがかかっているのも先の短い人生を楽しく送りたいとの一心から。思わぬ空想が湧き起こったのも回復の兆候。もう少しの辛抱だ。

元首相も出口のないトンネルはなく、雪国ではない一筋の光が必ず射すと言っていたではないか。あれは本当だった。惜しい人を無くした。

最近のウィルスはもう日本人をいじめるのは飽きたのだ。増殖するのも疲れたのでこれから少数精鋭の維持部隊を残し、雌のウィルスは美人薄命に変異転換する道を選んだのである。なかなか賢いウィルスだ。

正直もういい加減にして。お願いだから。

人との関係が希薄な社会に追いつけかけたとようなこの間。いつも持ち歩いている本があります。「本所おけら長屋」今までに十七巻発刊されているのですが、気楽に読めて損をすることはありません。次のセリフはその中の一節です。

「人は血でつながってるんじゃない。心でつながってるんだ。このおけら長屋の連中を見てみる。もとはみんな他人じゃねえか。なのにこうして他人のことに必死になってやがる」

「あんた、重い荷物を一人で背負い込む気なのかい。おけら長屋は何のためにあるんだい。その重い荷物をみんなで少しずつ分け合うためだろ。この長屋に住む貧乏人はね、そうやって生きていくのさ」

これって福祉じゃないですか。あくまで「個人の感想です」

（大塚福祉作業所 所長）



## コロナ禍の日々の中で

宮井 真由美

我が家の長男、健吾は現在35歳。小学校6年生の時にふる里学舎と巡り合い、以来ずっと支えてもらっています。

コロナ禍が始まり、今までのように隔週で帰省できなくなった健吾。自閉症の健吾は、生活の変化や先の見通しがつかないことがとても苦手です。情緒が不安定になり、問題行動が増えてしまいます。帰省できなくなることで、健吾がふる里学舎で不安定になることを私はとても心配しました。

ところが、意外にも健吾は健吾なりに、目に見えない敵「コロナウイルス」を理解してくれたのです。健吾がそのような境地に達するまでには、きつと様々な問題行動があり、職員の方々にはご苦労をおかけしたことは思います。親としては、健吾の成長を嬉しく感じました。

コロナ禍で、感染拡大を防止するためには「新しい生活様式」を守り続けるしかありません。しかし、知的障害者の施設で「新しい生活様式」を守ることは困難です。にもかかわらず、その状況が社会に十分に認知されているとは言えません。そして残念ながら、無理解な人たちから非難されることもあります。



先日、里見理事長とお話する機会がありました。里見理事長は「以前のように子供たちに外出や一泊旅行をさせてあげたい。」とおっしゃっていました。日常の生活を守るだけでなく、子供たちの余暇も大切に考えてくださる里見理事長の懐の深さにふれ、感動と尊敬の気持ちでいっぱいになりました。健吾がふる里学舎で生活できる幸せを改めてかみしめました。

ふる里学舎は、子供たちの快適な生活を維持し、かつ、コロナ感染防止に適切に対応されています。外部からコロナウイルスを持ち込まない対策を徹底し、利用者が約1500人という大所帯にもかかわらず、クラスターを発生させていないことは、並大抵の努力ではないと拝察いたします。ふる里学舎職員の皆様のご努力とご苦労に対し、親として頭が下がる思いです。心からお礼申し上げます。

さて、ここからは、家族会の役員としての立場でお話させていただきます。

子供たちが快適な生活が送れるように、ふる里学舎では様々な催しが行われ、子供たちは楽しく過ごしています。また、日常の生活でも職員の皆様には、親身になって子供たちに接していただいています。子供たちは、親がいなくても楽しく平穩無事に生活しているのです。マスクの着用ができず、三密を避ける行動もできない子供たちが快適に過ごせ、かつ感染防止もできていることは特筆に値すると思います。家族会として、ふる里学舎職員の皆様に感謝申し上げます。

家族会として可能な限りふる里学舎に協力したいのですが、現在はコロナ禍なので活動が制約されています。環境整備や清掃ボランティアは延期となっています。販売ボランティアだけは状況をみながら実施しています。今年の夏は家族会から「スイカ割り」を提案し、スイカをプレゼントしました。各事業所の夏のイベントで実施していただき、大好評だったとお聞きしています。



私たちが家族にとつて、何よりも一番大切なことは、家族会の会員も非会員も関係なく、一人ひとりが、ふる里学舎の活動に共感し、応援し、感謝の気持ちを職員の皆様に伝えることだと思っています。

私は家族会の広報を担当しています。家族会だよりでは、会員の方々の声やふる里学舎の活動等を紹介しています。これらの活動を通して、ふる里学舎に関係する方だけでなく、少しでも多くの方にふる里学舎の活動や障害者の実態や取り巻く環境を理解していただきたいと考えています。

今後家族会として、ふる里学舎と緊密に情報共有や意見交換を行うとともに、家族会がふる里学舎に協力できることを考え、実行していきたいと思っています。

コロナ終息後、家族一泊旅行や研修旅行で職員・会員の方々とお会いし、お話しできる日を今から楽しみにしております。

(ふる里学舎蔵波 保護者)

## 8カ月を振り返って

鈴木 康介

暖冬の為、例年より早く散り始めた桜の花びらが舞う令和3年4月1日、私も含めた新卒者33名は辞令交付式に参加させて頂きました。

新型コロナウイルスの感染予防対策の為、例年よりも規模を縮小した形だったようですが、沢山の先輩方に温かく迎え入れて頂き、とても嬉しく、気が引き締まる社会人のスタートとなりました。同時に、これまで私を支えてくれた沢山の縁を思い返していました。

私が初めて福祉に関心を持ったのは、高校時代のことです。自宅からの通学が大変不便な学校の野球部に入部をしたところ、監督に学校近くの社会福祉法人へ交渉して頂き、施設の一部屋で下宿をさせて頂くこととなりました。

夜中に素振りをしていると夜勤スタッフに励まされたり、利用者の方々に「おかえり」「応援しているよ」と気軽に声をかけて頂くなど、家族と離れた生活でも寂しい思いをすることがなく勉強や野球に専念することができました。そして少しずつ、将来は自分が生活をしていたような家庭的な雰囲気福祉施設で働いてみたいと思っています。



高校を卒業し、自宅へ戻ると同居していた祖父が体調を崩しており、趣味であった野菜作りができなくなったことを嘆いていました。これまで畑仕事は一切経験がありませんでしたが、時間を見つけては祖父と畑に行き、指示を出してもらいながら野菜作りを行いました。初めて収穫したじゃがいもを食べたときの美味しさと、祖父の嬉しそうな顔は今でも忘れることはできません。残念ながら一昨年に祖父は他界しました。

祖父と過ごした時間は決して長くはありませんでしたが、モノづくりの難しさや楽しさを教えてくれました。佑啓会に入職し、配属先が野菜作りの作業科だと聞いたときはある種の縁を感じ、これまでの経験を生かせることができると思いました。しかし実際に働き始めてみると、そんなに上手くはいきませんでした。畑の規模が祖父の畑の8倍近くあり、同じ野菜でも生産方法が異なることに戸惑う日々でした。また、先輩職員と同じようにお願いしても利用者の皆さんはなかなか動いてくれないことに悩む日々が続きました。

先輩職員からアドバイス頂き、利用者さんに対して口先だけではなく、誰よりも体を動かし、がむしゃらに畑を動き回った結果、利用者の皆さんから少しずつ認めてもらい、名前を呼んでももらえるようになりました。今では、以前よりは作業がスムーズに進むようになりました。炎天下や早朝の作業など大変なときもありますが、やりがいを感じる日々を送っています。

またとても嬉しかった出来事として、入職から数カ月過ぎた頃、私の出身大学である千葉商科大学人間社会学部の恩師、勅使河原教授から農福連携についての連絡がありました。ふる里学舎蔵波で栽培していたトマトを原材料にしたクラフトビール開発の提案でした。職場の上司や同僚、利用者の皆様のご協力、大学の皆様の熱心な活動により『ルビール』が完成しました。

今年度はトマトの生産量が予定よりも少なかった為、来年度はトマト栽培を成功させ、ルビールの生産量も増やしたいと思っています。



トマトの赤を“ルビー”に見立てた『ルビール』。  
『感謝』と『愛』の贈り物です。

仕事以外でもとても充実した日々を過ごすことができています。ふる里学舎は福利厚生が充実しており、部活動にも力を入れていることを採用説明会でも聞いていたので入社前から楽しみにしていました。私は、小学校から大学まで続けてきた野球を続けたい思いがあり、全国大会で準優勝の実績がある野球部に入部しました。

今年度は新型コロナウイルスの感染予防対策の為、例年よりも規模を縮小した形での活動でしたがそれでも全力で取り組める環境があったため、楽しく参加することができました。残念ながら今シーズンには個人成績が振るわず、チームに貢献することが出来ずに悔しさが残っています。その悔しさをばねに、来シーズンに向けて、練習に励んでいきたいと思っています。

里見理事長がいつもおっしゃる「仕事も本気・遊びも本気」は部活動を通して実感しています。



来シーズンこそは…！

入職してからあつという間に8カ月が経ち、まだまだ慣れないことはありますが、少しずつ任される仕事も増えてきました。今後自分が生き生きと過ごすことがお世話になっている方への恩返しだと思っています。仕事も遊びも全力で取り組み日々成長していきたいと思っています。

(ふる里学舎蔵波 支援員)

## 編集後記

ついこの間まで、「この暑さはいつまで続くのか・・・」と嘆いていたはずなのに、秋をいつの間にか追い抜き本格的な冬がすぐそこまで。

季節も移ろい、世の中の状況も日々変化。気が付くと『当たり前』が大きく変わってきたように感じますが、利用者も職員も、昔も今も変わらない笑顔で、充実した日々を送っています。来年こそはみんなで温泉旅行に行けますように・・・そんな願いを込めながら佑啓118号をお届けします。

(支援員 関岡 弘太)